

巻頭言「協働で育む生きる力」

教育研究所連絡協議会委員長 北川 誠

現代の子どもたちは、デジタル機器や便利なサービスに囲まれた生活の中で、目に見えない関わりや小さな気遣いに触れる機会が、以前より少なくなっているように感じます。けれども、子どもたちの心を育むのは、最終的には人と人とのつながりです。教職員の一言、友達とのやり取り、地域の人との交流。そうした関わりは、一瞬では気づかれないかもしれませんが、やがて子どもたちの成長の土台となり、支える力となります。

私自身、教員としての歩みの中で、小さな関わりが子どもたちに与える影響の大きさを、数え切れないほど目にしてきました。「ありがとう」と伝えること、困っているときにそっと手を差し伸べること、心に寄り添い話を聞くこと。ほんのわずかな行動であっても、子どもたちの自己肯定感を高め、挑戦する勇気や学ぶ意欲を引き出す場面を何度も経験してきました。

だからこそ、私たち教職員が子どもたちの声に耳を傾け、心に触れ、共に歩もうとする姿勢が何より大切になります。日々の授業や学校生活の中で出会う小さな瞬間を丁寧に受け止め、成長を信じて支えること。そのことで、子どもたちが未来を切り開く力を身に付けることにつながっていきます。

小さな関わり積み重ねが、やがて大きな変化を生み出します。教職員の皆さまには、目の前の子どもたちと向き合い、互いに関わり合いながら歩む喜びを、これからも感じていただきたいと願っています。

研究所便り「これからの教育を共に考える」～おだわら未来学舎～

教育指導課指導主事 中野加弥子

令和 7 年度のおだわら未来学舎全 4 回が終了しました。今年度は各回に多くの参加があり「明日からの子どもとの関わりの中でいかしたい。」という感想をいただきました。参加者の皆様と「明日からの小田原の教育を共に考える」機会をもつことができうれしく思います。ありがとうございました。

第 4 回おだわら未来学舎は、令和 6 年度教育講演会の講師、工藤勇一先生をお迎えし開催しました。演題は「子どもの自律を支援する学校経営～生徒指導の手法と保護者対応～」です。昨年度の講演内容を土台に、具体的な場面設定のもと、子どもや保護者にかかる言葉などをお話いただきました。学校生活で子ども同士のトラブルが起こることは当たり前のことであり、その解決のための力を子どもたち自身が身につけるための支援（指導ではなく）が大切であること、またその支援は保護者と信頼関係を築きながらともに行うことが大切であること、そしてそのための私たち教職員の姿勢や技術について学ぶことができました。

9 月に行った第 3 回おだわら未来学舎、小林宏己先生を講師にお迎えしたこの日も、多くの参加がありました。「自律的に学ぶ子どもの育ちをめざして」の演題で、「子どもたちはどう学びたいのか」を描く単元構想についてのお話でした。両先生のお話の共通点は「あなたはどうしたいの？と問う」ことです。これは、昨年度私が参観した幼稚園の活動でも小学 6 年生の総合的な学習でも、担任の先生が子供たちに繰り返しかけていた言葉です。子どもたちが課題や疑問を自分事として考える機会をもつことにより「自律」を「支援」する取組が、小田原市ではすでに広がっていることを感じました。

小さなこころみ 令和6・7年度共同研究「小田原版 STEAM 教育の充実に関する研究」

教育指導課指導主事 眞鍋 智洋

共同研究員

◎田中 穂積（城北中） ○角野 篤（千代中） ・伊與田 裕樹（白鷗中）
・生月 美帆（鴨宮中） ・福岡 生実（泉中）

令和4・5年度の先行研究を踏まえ、「小田原版 STEAM 教育」のさらなる充実をめざして2年間の研究に取り組みました。本研究では、【広げる実践】と【深める実践】を増やしてそれらを市内に広めることを目的とし、「広がり」を「仲間との協働を通して視点や気づきが増えていくこと」、「深まり」を「探究のステップを行き来しながら、考え直しや試

【各校の重点的な取組】

城北：UD の視点を生かした、探究が自走する仕組みづくり

千代：地域とのつながりを生かした探究活動

白鷗：探究のサイクルを多く回すためのファシリテーション

鴨宮：行事と接続した探究の位置づけと教員連携

泉：探究活動と地域の関わり方の工夫

行錯誤を重ねていくこと」と定義して取組を進めました。共同研究員は各校の特色を生かした重点的な取組を設定し、「広がり」と「深まり」をめざして実践を行いました。また、独自の生徒向けアンケートを作成し、それを活用することで「生徒の姿」と「データ」の両面から実践の効果を検証しようと試みました。

研究の結果、生徒に関しては、探究プロセスにおける「深まりと広がり」が見られましたが、「深まり」の程度に関しては生徒個々の差が明らかになりました。教師に関しては、活動の「経験」を「学び」に転換するためのファシリテーション力の向上が見られた一方で、こちらも個人差が生じる結果となりました。地域とのつながりに関しては、自分の暮らす地域の課題に対する生徒の意識が高まり、「自分ごと」として捉える様子が見られましたが、地域と学校のつながりには持続性と双方向性に課題が残りました。

ある教室から「インクルーシブな学校・学級づくりに欠かせない“関わる力”

教育指導課指導主事 上條 大志

「そっとしておいてあげてください。時間が経てば、きっと戻ってきますから」

ある教室の隅で、一人静かに落ち込んでいる子がいました。私が「どうしたの？」と声をかけると、別の子がそっと教えてくれた言葉です。その言葉は、単なるアドバイスではなく、共に過ごす時間の中で築かれた深い信頼と理解から溢れ出たものだと感じました。

また、別の日のことです。転入のため学校見学に来られた方へ、ある子がにこやかに語りかけました。「〇〇小学校は楽しいですよ。ぜひ来てください！」

期待と不安が入り混じる思いで来校された見学者の方は、その真っ直ぐな言葉に、どれほど心を解きほぐされたことでしょう。

この二つのエピソードは、いずれも特別支援学級での出来事です。Aさんのエピソードからは、仲間の個性を丸ごと受け入れ、「今、この子にとって何が最善か」を主体的に判断する深い共感力が伝わってきます。Bさんのエピソードからは、自分の居場所に誇りを持ち、それを初対面の相手にも進んで発信できる確かな社会力が感じられます。

これらは、教室の中で子どもたちが丁寧に育ててきた「関わる力」の結晶だと思います。相手を思いやり、自分にできることで貢献しようとする。この「関わる力」こそが、誰もが自分らしくいられるインクルーシブな学校・学級づくりにおいて、欠かせない力なのだ改めて教えられました。